津波の記憶 後世に

子孫思う心 地域に刻む

9.1 防災の日 ―災害地名

害日本大震災で被災した沿岸部には、津波災害の歴史を地に刻んだところが少なからず残した「災害地名」は震災後、その重みを増している。宮城県を中心に津波災害に由来する地名などをたどり、先人の警鐘のメッセージに耳を傾けた。

宮城県地名研究会の会長を務める太宰幸子さん（68）＝大崎市＝は、震災後に県内の沿岸部を調査し、津波にまつわる地名が無々と伝えられていることを確認した。

南三陸町唐桑半島の入口にある津波の水戸（きょうつかど）は、津波が押し寄せてきた時、お田の念仏田も住所表記にはない地名だが、「伝説」は語り継がれていた。

ユニークなのが、七ケ浜町の昌浦田海岸辺りの高台に位置する投（まとき）。1611年、名として残る。

太宰さんは「過去」又「災害」・崩壊地名」地名になっていた地形が、津波説がうまく結び付いて災害地名になったので、ことの始まりの伝言を昌浦田に、古文書は市町村合併や宅地開発によって急速に失われている現状に警鐘を鳴らし、防災の研究者から注目された。

今後、津波被害を受けた沿岸部では住居などの高台移転に向けて山林の造成が進み、新しい宅地に新しい地名が付けられる可能性もある。

太宰さんは「古い地名は津波災害の悲惨さを伝え、子孫や地域を守ろうとしてきた。新たに地名を付ける際はともとの地名を前提とし、先人の知恵と子孫を思う心を生かしてほしい」と語っている。

太宰さんは「過去」の震災三陸津波の時、高台にいた人々が「こっちへ、こい」と手招きして波災害害を免れたとの言い伝えは、「災害・崩壊地名」地名にこめた祖からの伝言を自費出版した。古い地名は、三陸沿岸には表の通り、浜や湾にいた人が付け地名が多いが、長須賀や須加原などのすが」は、「州処」が起源で、かつて水だったことを指し、黄金（こがね）は砂浜を意味するという。

昔は海だったが、砂が寄せられたり、人工的に埋め立てられたりして、次第に人々が移り住んだ土地だった。

太宰さんは「過去に海だった場所に良い印象の文字が当てられてしまい、昔はどんな土地だったのかわかりにくくなっている」と指摘する。

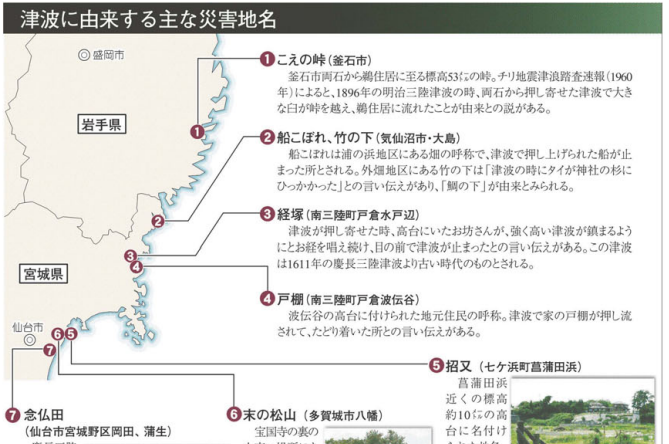
太宰さんは2009年、内陸部を中心にした長年の研究成果として「津波・崩壊地名」地名にこめた祖からの伝言を自費出版した。

津波被災地にみられる主な地名

地名の漢字	意味や由来
浜、浦	海辺、水辺を指す
釜	海水を塩にする釜があった所で、海辺を意味する。アイヌ語で湿地帯を指す場合もある
須賀、須加	もともと「州処（すか）」という砂の堆積した地を指す
黄金	砂浜を意味する。「粉金」「小鉄」（こがね）などに良い印象の字が当てられた
潮、塩、汐	海岸線がより込んでいた地形のこと
津	かつて港など海辺があったことを示す
蛇	洪水など水害が多い一帯に付く
明戸	水はけの悪い土地のこと。船で上陸する地点だった「上戸」を意味する可能性もある
隈	川が曲流している地域。洪水に注意したい

※宮城県地名研究会の太宰幸子会長による

津波に由来する主な災害地名



※❶は首藤伸夫東北大名誉教授、❷、❹は白幡勝美気仙沼市教育長、❸、❺～❼は太宰幸子宮城県地名研究会会長による

波が引き去り「かわら」に… 「屋号」にも記録を残す

自宅前に石碑を建立した小山重之さん。内陸側と外海側からり寄せた慶長三陸津波が自宅付近で衝突したと伝えられている

巨大津波が何度も押し寄せた三陸沿岸。津波の情報が、一門や一家の「屋号」として受け継がれている家もある。

気仙沼市の旧唐桑町の歴史をまとめた唐桑町史（1968年発行）によると、1611年の慶長三陸津波の時、唐桑半島の内湾側と外湾側から押し寄せた津波が陸地を駆け上がってぶつかり、半島が分断されたと伝えている。

この津波がぶつかって折り返した同市唐桑町馬場にあるのが「おり」という屋号の家だ。町史は古老の語伝えとして「（津波が）折り返して両岸に引き去ったので『おり』という地名と屋号が出来」と記している。

屋号を持つ家を訪ねると、今の表記は御里（おり）。「かつては折の字で、昭和に入ってから緑起の良い字にしようと変えた」という。今も瓦屋根の棟部には「折」の文字が刻まれている。

唐桑町史は近くに屋号が「かわら」の家もあり、「（慶長三陸津波の）波が引き去って磧（河原）になり『かわら』という屋号ができた」と記す。この家の小山長寿さん（80）によると、現住所に引っ越す前の家は浜のそばにあり、1896年の明治三陸大津波で流出したという。

地元で防災教育に力を入れる若草幼児園長の小山重之さん（83）は昨年10月、この町史の記述を刻んだ石碑を自宅に建立した。「震災は繰り返し起きることを後世に伝えたい」と力を込める。

同市の離島・大島には「合柄（がっから）」という屋号の家もある。こちらは室町時代の津波伝説が残る地域で、地元住民は「柄は殻の当て字で、津波で大量のカキ殻が打ち上げられた場所ではないか」とみている。

津波伝承に詳しい気仙沼市の白幡勝美教育長は「情報を記録として残しにくい時代に、屋号や地名を記録手段として遺ムだことがすごい。災害を後世に残すという先人の重い意志を受け継いでいきたい」と語る。